

「多様な学びの保証」居場所事業について

不登校児童・生徒の状況

不登校児童は増加傾向にある。オンライン学習に参加することが難しい児童が複数名いる。学級には入れないが学校との関わりを求め、保護者と担任が協力して、別室登校できている児童も複数名いる。多様な学びを保証するために、オンライン学習や別室登校の充実を学校として推進している。

具体的な取組

【スタディルームの活用】

児童の「多様な学び」を保証するために空き教室をスタディルームと名付けて活用している。校内の居場所事業の中心的役割を果たしている。児童は、オンライン学習をしたり、課題に取り組んだりしている。学年ごとに取り組めるプリント課題も準備している。

【談笑スペースの活用】

昇降口横にテーブルと椅子を用意し、談笑できるスペースを設けた。登校できない児童が課題を提出しに来たときに、担任が課題を確認しながら、児童・保護者と談笑するスペースになっている。雑誌を置き、保護者同士がコミュニケーションを取るスペースにもなっている。

【保護者サークル】

不登校児童の保護者が有志でサークルを作っている。月1回程度で学校内にて会合を開き、時々副校長や生活指導部の主幹教諭が参加し、悩みを聞いたり、助言を行ったりしている。LINEのオープンチャットを活用し、情報共有も行っている。

【サークルイベント】

サークルの保護者が中心となって校内外でイベントを行っている。スタディルームでうどんやパスタ、マシュマロ作りを行った。



成果

学校内で不登校対応や居場所づくりの取り組みを行っていることについて、多くの保護者から肯定的な意見をいただいている。様々な学び方があることを利用していない児童の理解が進んできた。

課題

学級数増加に伴い、場所の確保が難しくなっている。別室登校の児童が多い日は、個別支援を行う支援員が足りなくなる。

「安心して登校できる個に応じた対応」について

不登校児童・生徒の状

当該生徒は、コミュニケーションを取り合うことに課題を感じ、人間関係を上手く構築できず不安や孤立感が生じ、友人ができなかったり、居場所が見付けられなかったりした。また、家庭での学習習慣が定着しておらず、学習意欲はあっても連続して学習することが難しい状況にある。

具体的な取組

1. 別室の開放

別室の開放により、自分のペースで学習に取り組める機会を設けるなどして、安心して登校できる環境を整えた。



2. フォローアップの活用

個別の学習指導を望む生徒を対象として、週に1回教科担当が個別指導を行っている。本人の理解度に合わせた指導を通して学習を進め、個別に適した学習方法を一緒に考えることで、学習や進路に対する意欲の向上を図った。

3. 教室環境のUD化

全教室において、UD化を行っている。どの生徒も集中しやすい教室の環境整備や、板書等が見やすく分かりやすくなるように、UDフォントや指示カードの活用等を実践している。

4. SCや巡回心理士との連携

不安を少しでも取り除き安心して登校できるように、定期的にSCとの面談を行っている。また、年10回設けている巡回心理士からの指導や助言をもらい、参考にして対応している。

成果

不登校の状態が続いた生徒に対し、担任を中心に別室登校や、SCや通級教室、養護教諭と連携し、対応を行ったところ、別室に登校できるようになった。また、週に1回のフォローアップでの個別指導に取り組むことで、進路に対して前向きに考えられるようになった。

課題

一昨年度の学校復帰率は22%で、昨年度は13%であったが、今年度はさらに減少傾向にあることが課題である。不登校生徒数自体は減っているので、復帰率が上昇するように、引き続き個に応じた対応を検討しながら、支援を行っていく。

別室登校支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、入学当初は、教室で様々な活動に積極的に取り組みながら学校生活を送っていた。しかし、複合的な要因による人間関係への困り感を感じるようになったことから、教室に入ることが難しくなり、1学期の途中から校内にある支援スペースへの別室登校をしている。

具体的な取組

【別室登校生徒の情報共有】

別室登校をするにあたり、どのように学校生活を送るのか、本人の負担にならない範囲での過ごし方を保護者と考え、情報を共有した。別室での学校生活の過ごし方についても、保護者と定期的に連絡を取り、連携に努めた。

【特別支援委員会・学年での検討】

特別支援委員会では、当該生徒の状況と特性について情報の共有を行い、学校生活の対応について検討した。その情報を受けて、学年教員は、支援スペースでの様子を見守りや当該生徒への声掛けなど、関わりの強化に努めた。

【別室登校生徒への支援スペースの活用】

校内の支援スペース「ほっとルーム」へ継続的に登校することができている。

また、本人の学習内容の定着度に応じて、学習に取り組んだ。当該生徒の学習の進捗状況に合わせて指導を行い、学習への意欲向上につなげられている。さらに、支援スペースで過ごす生徒と交流する場面も見られ、コミュニケーションの確保につなげることができた。

【支援員・生活サポーターとの関わり】

支援員・学校生活サポーターとの関わりを通して、安心して学校生活を送ることに繋げることができている。支援員の方に教わりながら、実技教科に関する学習に励んでいる様子も見られた。



成果

加配教員と学年、支援員等が互いに連携をしながら、該当生徒への対応を行った。学校に継続的な登校ができており、さらに友達や大人との交流の機会が確保できていることは、該当生徒にとって大きな前進であったといえる。

課題

別室登校の生徒への学習のサポートや学習内容の設定に課題がみられる。また、将来的な見通しをもった指導の強化が必要である。

別室指導教室「レインボールーム」について

不登校児童・生徒の状況

本校では、全く学校に登校できていない児童、オンライン学習や担任との個別の学習に取り組める児童、登校しているものの周囲の声や物音に苦手意識を抱えている児童が、ここ数年各学年に在籍している。こうした児童の、「登校したいけれど、教室に入るのが不安」という気持ちを取り除く場所として、「レインボールーム」を設置した。

具体的な取組

【教室について】

空き教室の半分スペースを活用している。利用児童が周囲を気にせず出入りできるよう、設置場所にも留意するとともに、指導が行いやすいように職員室からも近い所に設置することとした。

室内は、パーティションで個人のブースに区切っている。利用児童に応じてオープンにし、関わり合う時間もある。

【利用児童について】

2年前から利用している児童が2名いる。また、普段は学級で、時々別室で生活する児童もいる。今年度は8名の児童が利用、または申請をしている。4年生以上の児童が大半である。新規の利用は、保護者からの相談や担任からの提案を受け、適切な利用について、情報共有してから開始している。

【過ごし方について】

今年度は、週3日、9時から13時まで開室している。利用児童は、9時頃登校し、担任や職員室に来て挨拶をして、その日の予定や課題を確認する。その後当教室で、オンラインで授業に参加したり、課題に取り組んだりする。給食時間は教室に戻ることができる児童もいる。

【担任との連携】

利用児童ごとにファイルを作成し、その日に取り組んだこと、生活の様子などを支援員が記載する。それを、担任、養護教諭、特別支援教育コーディネーターが回覧し、情報の共有や連携に活用している。



成果

- ・教室で集団生活・学習に参加しづらい児童にとっての居場所となり、登校のきっかけとなっている。
- ・校内でオンライン授業への参加、課題や給食の受け渡しの時間が、担任や学級の友達との良い接点となっている。

課題

- ・長期間の利用児童の教室復帰や、更なる支援の方法や体制の模索が必要である。
- ・定期的な開室のための安定的な支援員の確保や配置。

「ほっこりルーム」の活用について

不登校児童・生徒の状況

合理性や一貫性を見いだしやすい小・中学校の関係にあっても、特に人間関係等でのトラブルがひとたび起こるとそこから脱することが困難となり、小学校から引き続き不登校となっているケースは少なくない。「自己の良さ」を発揮したり、新たな自己の姿に挑戦しようとする姿勢を出しづらく、長期化する傾向がある。

具体的な取組

生活指導部とは別に、「教育相談部」を校内組織の分掌に位置付け、不登校の対応に特化した取組として、部会を月2回開催している。当該生徒の状況等について情報共有を図ることを通して、本人及び保護者に対する支援方法を確認し、組織的な対応に繋げている。

令和3年より、各学期に専門の講師を招いた「不登校等生徒の保護者会」を開催した。学校に対する要望の聞き取りだけでなく、当該保護者が孤立することがないように「繋がり」も狙いとしている。

別室の象徴としている部屋では、当該生徒の望む空間が「居場所」となるよう支援をしている。学校生活サポーター、学生ボランティア等の活用を積極的に進めている。

個々の不登校生徒への支援

登校時の「メンタルのサポート」「基本的な学習のサポート」の両面を行っている。メンタルのサポートの一環として、教室を開放し、友達と関わりたいという気持ちのサポートを行っている。給食を一緒に食べる、休み時間を一緒に過ごすことで、徐々に友達との関わりを深め、教室復帰への足がかりとなるよう努めている。



成果

落ち着いた環境で、徐々に友人との関わり深めながら教室復帰できるケースが増え始めている。また、学習について基本的な学習のサポートを続けることで、自信を取り戻し、教室復帰につなげていくことができつつある。

課題

交通の便が悪いことから、サポーターや学生ボランティア等の安定した人材確保が非常に困難と感じつつある。

登校がしんどい生徒の対応について

不登校児童・生徒の状況

小学校高学年から不登校傾向になり、その後、起立性調節障害という診断がされた。中学校 1 年の 1 学期は徐々に教室へ行くことが難しくなり、不登校になる。第 1 学年の夏休み前後から別室の登校につながった。現在は、ほぼ毎日「別室」に登校でき意欲的に活動している。

具体的な取組

SC 面談を定期的にいれる（週 1）

- 別室の取り組みや、困っていることを当該生徒に発表を通して表現させる。
- SC から特別支援教育コーディネーター・包括支援員への助言
- 医療と家庭から当該生徒の情報を整理して共有

教育相談部会で

本人の様子と今後の方針確認

- 当該生徒の様子を全教職員に共有
- 担任の関わり方、本人への声掛け
- 別室の運営・課題解決
- 行事参加に向けた支援をどう行うか（運動会・学習発表会の個別対応）
- 保護者への連絡などの支援

別室利用（学校 1 年の夏季休業日から）

- 包括支援員による見守り
- 「自主学习」による静かな学習空間
- 「小集団活動」SST・エンカウンター・レジリエンスなどの要素を含むボードゲーム・創作活動（黒板アート等）・清掃活動
- 進路に向けた取組（夏季休業中別室）

外部機関との連携・人的支援

- 児童館職員との交流（児童館の紹介・遊び交流）
- 包括支援員の研修の機会
- 別室支援員の活用



成果

別室に登校する中で、起立性調節障害や「他者とのコミュニケーションの取りづらさ」「相手の気持ちを汲み取る」などの課題が見えてきた。別室利用で「少人数活動」を取り入れることで改善が見られ登校が安定した。運営には常時いる支援員に支えられた。

課題

別室支援に関わる方の研修の機会を設ける。教職・福祉の有資格者の配置が実現できれば、更なる支援の充実が期待できる。

支援関係機関との連携・別室／教室での学習支援について

不登校児童・生徒の状況

- ・全校生徒 650 人のうち約 6 % に不登校の傾向。(通常は在籍児童の 1.7%)
- ・大人数の中での人間関係の作り方に課題を感じる生徒が多い。
- ・各クラスに 2～4 人程度の学習支援が必要な生徒が存在。
- ・保護者、教員が支援機関に対する情報の周知・徹底が不足。

不登校児童・生徒支援への具体的な取組

- ・校内委員会での不登校・登校が難しい・学習支援が必要な生徒の把握
- ・区教委と相談・学校生活サポーターの募集と確保
- ・包括支援員・特別支援教育コーディネーター・学校生活サポーターによる別室等の巡回と支援
- ・面談を通じた、不登校生徒をもつ家庭へ、支援機関の情報伝達と連携

別室登校の生徒に対して

- ・(限定的ではあるが)週 2 回(月・水)英語と数学の 2 教科、本校外の講師により別室での個別指導を実施。
- ・(限定的ではあるが) 包括支援員、特別支援コーディネーター・学校生活サポーターにより別室の巡回と支援

成果

- ・面談を通じて、教員から不登校の生徒の保護者に支援機関の情報の周知が図られ、連携を進めていく素地が広がった。
- ・別室、各教室で学習支援を必要とする生徒が、学校生活サポーター等の支援により、授業内容に取り組もうとする姿勢や、参加しようとする意欲の向上が見られた。



別室に用意した個別学習スペース

課題

- ・人間関係の作り方に悩む生徒への支援が不十分→ グループエンカウンターなども含む効果的な対策を考え、本格的に実施していくのであれば、SC・包括支援員とは別の不登校専任で対応できる人員が必要と思う。
- ・別室、各教室での学習支援が必要な生徒の支援が限定的→ 実施により効果は確信できるが、現実的には必要と思われる人数の半分程度の充足率であるため支援と効果が限定的である。理想的には各クラス 1 名、別室 1～2 人、それぞれ 6 時間の勤務時間とする人員がいればより高い効果を期待できる。